2020 2

令和2年2月10日発行（毎月1回10日発行）　通巻318号

人生100年時代　共生社会の生き方情報誌

さあ言おう

さわやか福祉財団

「新・助け合い体験ゲーム(実践編)」ご活用ください！

住民同士の**助け合いの地域づくり**、地域の**ニーズや担い手掘り起こし**に、「新・助け合い体験ゲーム」をご活用ください！

生活支援コーディネーターや協議体、地域包括支援センター、行政など助け合い関係者の皆様に、ワークショップでのツールとして好評です。

また、アイスブレーク用としても効果的です。

第1部「近隣 助け合い体験」

「近隣助け合い体験」用の60種類のサービスメニューカードや白カード（欲しい、あるいは自分ができるサービスを自由に記入）を使って、助け・助けられる楽しさを実感しましょう！　サービスの内容によってカードの背景の色を区分けしました。どの色のカードを多く選んだかによって、自分の得意分野がわかります。

第2部「ニーズの掘り起こし」

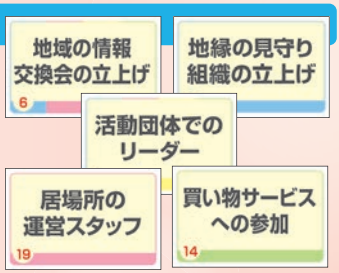
地域のニーズ（足りない助け合い活動）や、どんな助け合い活動があれば解決できるかを同じグループの人と考えます。グループごとにニーズや解決法を発表し、グラフ化し、全員で共有します。

＊実際の使い方や進行の手順、ポイント等は「解説書」をご覧ください。

1,100円（税込み・送料別）
ご希望の方は事務局までご連絡ください。
→Tel (03) 5470-7751

第3部「担い手の掘り起こし」

「担い手の掘り起こし」用の27種類のサービスメニューカードや白カード（「地域のニーズ」に対応するものを自由に記入）を使って、〝自分がどんな活動ができるか〟を選び、４つのチーム（自治会などの地縁活動、居場所づくり、助け合い活動を行う無償ボランティア、家事支援や配食・移送などの有償ボランティア）に分かれ、それぞれのチームで助け合い活動の立ち上げに向けて具体的に話し合いましょう！



人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

さぁ、言おう

2020年2月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

有償ボランティアを進めよう

清水 肇子

4 寄付・遺贈のこころ Vol.13

〝思いを預かり、引き継ぐ〟

故 小髙根 美那子さん

故 小島 正治さん

8 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

地域で「気づく」「支える」「つなぐ」を大切にして活動を展開

支えあう地域づくり なないろの会（山形県）

14 看取り・終末期を考える 裏を見せ、表を見せて…

旅人かへらず 旅に病んで夢は枯野をかけ廻る 現代に通じる芭蕉の辞世

尾﨑 雄

新しいふれあい社会づくりに向けて

● 新地域支援事業・助け合いの地域づくり

18 北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

24 ご支援ありがとうございます。
さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介

26 さわやか活動日記（抄）

⑯さわやか豆知識

㉕『さぁ、言おう』バックナンバーのご紹介

㉘みんなの広場/投稿募集

㉚さわやかパートナー・『さぁ、言おう』のご案内/表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと ● 清水 肇子

新しいふれあい社会　実現への道

有償ボランティアを進めよう

さわやか福祉財団　理事長　清水　肇子

一般の読者の皆さんは、有償ボランティアと聞いてどのくらい関心を持っているだろうか。

生活支援コーディネーターや自治体など地域づくりに取り組んでいる人たちからは、進めたいけれどなり手がいない、あるいはどう取り組んでいいかわからないという声が少なくない。一方で実は都会はもちろん、高齢過疎に直面している地域でも、住民の皆さんが「我がまちに最後まで」の思いで、有償ボランティアの助け合いを積極的に広げる動きが増えてきている。

そんな中、昨年末に国の社会保障審議会の介護保険部会における次期介護保険制度の見直しの意見書で、有償ボランティアについて新たな推進策が盛り込まれた。ひと言でいえば、「総合事業で有償ボランティアの謝金も補助の対象とする」というものだ。

確かに、有償ボランティアでは本人が通常全額負担するため、生活支援を標準額でお願いするとして、1～3割程度で済む制度サービスと比べて負担が大きく広がりづらい状況があった。

今全国の自治体が取り組んでいる地域づくりでは、どこも住民参加の助け合いをどこまで広

げられるかという課題に直面している。無理な押し付けは論外だが、目標は生活支援をどこまで住民力、地域力で支えられるか。今回の意見書では、併せて、要介護者も総合事業が選択できる方向性も打ち出された。生活支援を助け合い活動で行うことで、利用者のその人らしい生き方を支え、また支援する人のいきがい、喜びも高めていくことができる。継続的な生活支援の助け合いの広がりには、有償ボランティアが有効なことは間違いない。

ただし注意も必要だ。有償ボランティアと労働・請負等の仕事とはそもそも異なる。総合事業における補助はいわゆるB型・D型など助け合いの推進を明確な目的とすべきである。

元々ボランティア・助け合いは、各人それぞれの思いに基づいて自由にやってよいものだ。謝礼も無償の助け合いに対するお礼の気持ちであって、その感謝を行政が公的な資金で代替できるようなものではない。補助は有償ボランティアを奨励するための支援であって、当財団では、この補助される部分は「奨励金」と理解するのがよいと国に提言している。

また、お互いさまの気持ちの対等性を損なわないためにも、利用者が相応の額を負担することは重要であり、全額補助としないことが望ましい旨を申し入れた。さらにいえば、補助要件として新たに過度な条件を要綱などに加えることのないようにすべきである。利用者と提供者双方の安全確保も他に触れられているが、研修は必要最小限にとどめ、後はチーム対応やOJTで学んでもらうなどし、推進に水を差すようなことは避けてほしい。詰めるべき点はいくつかあるが、具体的にどう進めるかは自治体の腕にかかっている。住民を信頼し、有償ボランティアをお互いさまでつながり合える地域の魅力的な仕組みとして皆で育てていきたい。

Vol.13

寄付・遺贈のこころ

遺贈寄付をありがとうございます

〝思いを預かり、引き継ぐ〟

これまでお寄せいただいた方々から（続）

今号ではお二人を取り上げた。お二方とも当財団として生前にお会いすることは叶わなかったが、様々な情報の中から、さわやか福祉財団の活動を気に留めて、貴重な資産を遺してくださった。非常に限られた情報ではあるが、その思いの一端をご紹介したい。

清水　肇子・大岡　朋子

音楽を愛し、生涯を通じて社会に関心を持ち続けた

故 小髙根（おたかね） 美那子（みなこ）さん

遺贈を含めて、活動に寄付をしてくれる方々は、日頃から社会への関心が高い。そしてこれまでお会いしたどなたも、前向きに人生を生きてこられている。社会のつながり、お互いさまの助け合いの必要性も心から理解してくれている。

それまでの人生を伺うと、とても充実した日々を送ってきた方も多い一方で、戦争を経てきた時代背景を含めて、大変な苦しみや悲しみに遭った

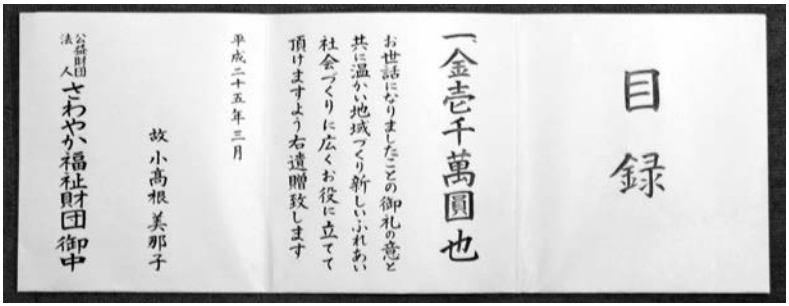
方々も少なくない。それが動機となった方もいれば、また、宗教的な考えで、日頃から寄付を身近に実践してきた方々もいる。

小髙根美那子さんは、ご両親の導きを受けて幼少期からキリスト教の教えが身近にある環境の中で育った。

さわやか福祉財団に連絡が入ったのは、２０１３年２月のこと。前年に亡くなった小髙根さんの遺言執行者から、「故人の遺志に基づき、遺贈寄付をお送りしたい」との申し出を受けた。

小髙根さんは１９２２年、北海道に生まれる。小さい頃から教会に通い、聖歌隊に入っていたという。将来は音楽の道に進みたいと目標をもって学んでいたが、時代はまさに戦争の突入期。様々な事情から残念ながらプロの音楽家としての道は断念し、その後、母校の音楽の先生として10余年勤めた。

後に頂戴した「召天礼拝式」の次第に記されたメッセージを見ると、教師生活の中での一番の思い出は、アメリカからキング牧師を招いての礼拝の際に奏楽を行ったときのこと。キング牧師が「こんな平和な礼拝は初めて


目録

一金壱千萬圓也

お世話になりましたことの御礼の意と共に温かい地域つくり新しいふれあい社会づくりに広くお役に立てて頂けますよう右遺贈致します

平成二十五年三月

故 小髙根 美那子

公益財団法人 さわやか福祉財団 御中

小髙根さんの遺言執行者からいただいた目録

です」と語られ、その言葉の重みに感銘を受けたという。

17歳で洗礼を受けた小高根さんは、音楽とともに社会福祉への関心を深く持ち続け、発生した東日本大震災の被災地を気遣い、とても胸を痛めていたという。

いつ頃から当財団の活動を気にかけてくれていたのかは定かではないが、そうしたお気持ちを伺い、遺贈寄付で頂戴した1000万円を「小高根美那子基金」として、当財団の東日本大震災被災地支援に活用させていただいた。

長らく東京に暮らし、晩年は千葉に転居。そして2012年秋に眠るように90歳で旅立ったという。神への祈りと、人々の心を豊かにしてくれる音楽を通じて、人と人との絆を大切にしていきたいという思いを実践し続けた一生だった。

移り変わる時代を生き抜いた人生100年の旅立ち

故 小島（こじま） 正治（まさはる）さん

小島正治さんは、1913年、激動の明治時代が終わった翌年に生まれた。小高根さん同様に、小島さんの生前の生活について詳細は伺っていない。この年は、最後の将軍・徳川慶喜が亡くなった年でもある。一つの時代が終焉し、そこから約100年、社会体制も庶民の暮らしぶりも、さらにかつてない激動の中で過ごした人生といえるだろう。

ご夫婦で東京に暮らしていたが、妻を84歳のときに亡くし、その後は一人で暮らしていたという。

受領した公正証書遺言の写しを見ると作成は小島さんが85～86歳の頃。奥様を亡くした後から具体的に手続きを進めていたのだろう。子どもがいなかった小島さんは現金・預貯金等は親族への相

続とし、自宅不動産をさわやか福祉財団に遺贈する手続きをしてくれていた。

「社会福祉活動の資本として活用されたく遺贈する」。記された遺言の文言に実直な人柄が感じられる。その後も長く元気に過ごしていたが、2012年に他界。100歳まであと1年余、まさに98歳の大往生の旅立ちだった。

身内にしてみれば、さわやか福祉財団という受贈先が出てきて心配もあったろうが、当財団の理念や活動を理解してくださり、生前、小島さんが自ら明確な意思をもって、さわやか福祉財団への気持ちを表明してくれていたことがうかがえた。

遺贈いただいた自宅不動産は更地にして売却し、その代金3700万円で「小島正治基金」として設定させていただいた。まさに社会福祉の仕組み、お互いさまの助け合いを広げるための全国の活動支援、サミット実施を柱とした事業に活用させていただいている。

小島さんが眠るお墓は、当財団の事務所からもほど近いお寺に建てられている。生前同様に、私たちの活動、社会の取り組みをずっとやさしく見守ってくれていることだろう。

小島さんが遺贈してくださったご自宅

地域で「気づく」「支える」「つなぐ」を大切にして活動を展開

支えあう地域づくり　なないろの会（山形県）

過疎化・高齢化が急速に進展している中山間地域では、地域活力の低下が深刻な問題になっています。こうした中、山形県白鷹町では住民が主体となった「地域における支え合い」の取り組みを通して、誰もが安心して暮らし続けるためのコミュニティづくりが進んでいます。その活動の様子を紹介します。

（取材・文／城石　眞紀子）

待ったなしの超高齢社会に突入

JR山形新幹線の赤湯駅からフラワー長井線に乗って約1時間。山形県南部置賜盆地の北部に位置する白鷹町は、町の中央を南北に最上川が流れ、西は朝日連峰、東は白鷹丘陵に囲まれた自

白鷹町に通じるフラワー長井線

活動拠点の「つどいの場にじ」

然豊かな地域である。

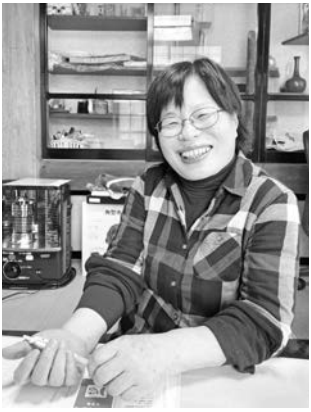
紅花（べにばな）生産量日本一で、隠れ蕎麦屋の里としても知られる同町だが、人口は年々減少して2019年4月1日現在で1万3675人。高齢化率の進行も著しく、すでに36％を超える超高齢社会に突入。後期高齢者の割合もその50％以上を占め、価値観の多様化や生活様式の変化などもあわせ、町の活力、集落機能の低下が深刻になっている。

一方で、町民の多くは強い郷土愛をもち、これからも白鷹町で暮らしていくことを望んでいる。そのため、同町では地域の特徴や課題を整理しながら、07年6月に「白鷹町認知症高齢者見守りネットワーク協議会」を設立。さらに16年3月には、区町会代表や民生委員児童委員、老人クラブなど17団体で構成される「白鷹町生活支援体制整備協議体委員会」を発足。住み慣れた地域で安心して生活するための生活支援や、健康寿命の延伸のための介護予防の取り組みについて話し合いを行い、生活支援コーディネーターとともに、支え合いを含めた地域づくりを進めている。

できることから始めてみよう

こうした状況の中で住民も自発的に立ち上がり、ボランティアによる支え合う地域づくりを目指して活動を始めた。それが、17年6月に有志7名によって結成されたグループ「支えあう地域づくり　なないろの会（なないろの会）」だ。代表の佐竹正子さん（69歳）にそのきっかけについて聞いた。

「私は白鷹町役場に勤めて健康増進計画の策定などに関わり、退職後は山形県が主催する〝16年度支え合いの地域づくり担い手養成講座〟を受講しました。研修では実際に居場所の計画・運営を体験してみるトライアル（模擬運営）があり、会場を借りて白鷹町で3回にわたって開催したところ、とても楽しくて継続して活動したいと思うように。そこで町内の同じ志の仲間を募り、なないろの会を立ち上げることにしたんです」


なないろの会代表の佐竹さん

活動を始めるにあたっては、同養成講座を前年度に受講した生活支援コーディネーターがつなぎ役として地域包括支援センター（包括）に相談。話し合いの結果、17年度の山形県福祉型小さな拠点づくり事業の補助金（上限100万円・1年限り）を活用して、同年6月より「福祉型小さな拠点づくり」をスタートさせた。

「まずは、町内の蚕桑地区コミュニティセンターを借りて定期的にやってみようと。活動メニューは茶話会だけではなかなか人が集まらないため、〝いきいき百歳体操〟という高齢者向けの健康体操とセットで開催することにしました。その間に活動の拠点となる場所探しをしたり、県内先進地のNPO法人『ふれあい天童』を視察するなどして居場所づくりの準備を進めていきました」

そして、10月には町との共催で「白鷹町支え合いの地域づくりフォーラム」を開催。当財団の「助け合い体験ゲーム」などを通して、地域の課題を地域で考える住民意識の啓発にも取り組んだ。

「白鷹町は最上川を挟んで、川西地区と川東地区に分かれていますが、これまで川西地区には高齢者が集える場所がありませんでした。そのため場所探しでは川西地区にこだわり、口コミで空き家を見つけ、廃校から備品をもらい、18年度からは介護保険の介護予防・日常生活支援総合事業の通所型サービスBに移行して、その年の4月に『つどいの場にじ』を開設しました」

会の名称の「なないろ」には、さまざまな活動を通して身体と心の健康づくりを行うとともに、高齢者から赤ちゃんまでの交流を目指し、何にもとらわれることのない活動を通していろいろな人を結ぶ〝にじの架け橋〟になりたいとの願いが込められている。

居場所づくりでつながりを深めて

「にじ」での活動は、まずは無理せず火曜日と金曜日の週2回とし、体操や茶話会、趣味の活動などを通して、誰もが楽しく交流できる場づくりを目指すことから始まった。

取材当日は、ちょうど「いきいき百歳体操」が行われており、参加者はDVDで体操の映像を観ながら、いすに腰掛けた状態で40分ほどの体操を実践。試しに一緒にやらせてもらったが、適度な刺激で足腰などの筋肉を鍛える〝筋活〟にはもってこい。

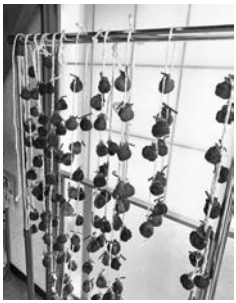
「一人ではなかなか続かない体操も、みんなでやれば楽しく継続することができ、閉じこもりや認知症予防にもつながりますからね」と佐竹さん。そして、体操の後は茶話会。お茶を飲み、差し入れのりんごやおやつをつまみながら、ワイワイがやがやとおしゃべりに花を咲かせる。食べ物や料理の話から健康談義まで話題には事欠かず、「アハハ」「アハハ」と笑いが絶えない。

「一人暮らしだから、家の中にばっかりいてもつまらない。ここに来ればみんなとおしゃべりできるから楽しいの」と話してくれたのは93歳のみどりさん。89歳のみつさんも毎回のように参加している常連さんだ。

「このあたりには、昔は互いの家を行

笑顔があふれる茶話会

いきいき百歳体操で健康づくり


みんなでなた巻きや
干し柿作り

き来する〝お茶飲み〟という風習があったんですが、今は人と人とがつながる場所がない。だから、こういう居場所が必要だと思うんです。みんなで干し柿や郷土食の餅粉菓子〝なた巻き〟を作ったり、クリスマス会や書き初めといった季節の行事を催したり。気兼ねなく、ゆったりのんびり、みんな一緒でみんな仲間。そんな温かさにあふれた居場所でありたいと思っています」

子ども食堂では月替わりのカレーランチを提供

広がる活動、増える仲間

居場所の運営を続ける中で、活動の幅も少しずつ拡大。川西地区には商店がほとんどないため、茶話会が終了するタイミングで生協の移動販売車に来てもらう買い物支援に取り組んだり、19年4月からは毎月第3土曜日に「子ども食堂」も開催している。

「集まる場がないのはお年寄りだけでなく、子どもたちも同じ。一人暮らしのお年寄りの方にも来ていただいて、みんなで一緒に楽しくご飯を食べながら地域で地域の子どもを育てる。そんな地域食堂のような場があったらいいなと思って、子ども食堂を始めました」

同じく4月から新たに活動に加わったのが、有償ボランティア「ほっとしらたか」だ。

「つどいの場の『にじ』でお年寄りの居場所を始めても、なかなか担い手が

増えないので、18年10月に町との共催で第2弾の『白鷹町支え合いの地域づくりフォーラム』を開催しました。その際、参加者70名にアンケートを取ったところ、『地域での支え合いは必要』と回答した人は全体の98％。その多くが『自分が取り組んでみたい助け合いがある』とのことでした。このアンケート結果を受けて、鉄は熱いうちに打てと、すぐさま『白鷹町支え合いの地域づくり研修会』という養成講座を4回シリーズで行うことにし、実際自分たちに何ができるかをグループワークで話し合ってもらったんですね。その一つに有償ボランティアがあり、このワークショップから『ほっと　しらたか』が誕生しました。みんなの声から生まれた活動なので、それならば、なないろの会が主体となって有償ボランティアを始めてみようということになったんです」

有償ボランティアは双方向の会員制とし、なないろの会のメンバー9名に加えて新たに6名が活動に参加。依頼内容は、当初は介護保険の認定が下りるまでのつなぎとして、料理や掃除といった家事支援が多かったが、最近では傾聴（話し相手）、猫のトイレ掃除、ごみ出し、病院や買い物の付き添い、デイサービスの送り出しなどいろいろなケースに対応している。

「活動者には栄養士や保健師、看護師、介護施設に勤めていた人、経理に強い人などいろんな人材がいるので、それぞれ得意な分野で力を発揮してくれています。また、傾聴のやり方を学ぶために養成講座に行ってもらうなど、一人ひとりの質を高めることも大切にしています」

行政とは課題を共有しながら協働

こうして立ち上げからわずか2年半余りで、地域で必要とされるさまざまな活動を創出してきたなないろの会。それを可能にしたのは、活動を推進してきたメンバーの熱意や行動力に加えて、自分たちがやりたいことをかなえるために生活支援コーディネーターや包括との結びつきを深め、連携を取って協働してきた点も見逃せないポイントだ。取材にも同席してくれた地域包括支援センター係長の永沢照美さんは、次のように話してくれた。

「地域づくりやボランティアなど住民主体の各種団体の育成を支援し、活動しやすい環境をつくることは、白鷹町の重要な施策の一つです。そのため、できることはバックアップしていきたいと、立ち上げ時には補助金の情報提供をさせていただいたり、フォーラムや研修会を共催するなどいろいろな形で関わらせてもらいました。また、生活支援コーディネーターはなないろの会の活動に参加して活動の内容を包括に報告し、支援が必要であれば、包括

に引き継いでくれています」

活動の主体はあくまでも住民だが、頻繁に話し合いの機会を持ち、時には町の考えも伝えつつ、課題を共有しているとのこと。

「協議体でも高齢者の生活支援について話し合っているので、なないろの会にもメンバーになっていただき、できることを一緒に考えてもらっています。生協の移動販売も、協議体で高齢者の買い物支援に関して話し合った結果を反映して相談したところ、『居場所に来たついでに買い物もできたらいいね』と生協さんに声を掛けていただき、実現したものです。町としては、なないろの会のような居場所をもっと増やしていきたいので、今後も活動をバックアップしながら啓発活動を続け、一緒に地域づくりをしていきたいと思っています」

永沢さんのこの発言に佐竹さんも大きくうなずき、「1人でも多くの人に、助け合いや有償ボランティア、居場所などが白鷹町に必要なものだと気づいてもらい、活動する仲間や利用者を増やしていきたい」との抱負を語り、最後に笑顔でこう付け加えた。

地域包括支援センターの永沢さん

「うちは、とにかくメンバーがいいから楽しいの。そのつながりが一番の宝。お互いを尊重しながら知恵を出し合い、ああでもない、こうでもないとやりながら、みんなで決めたことをみんなで実現し、地域を盛り上げていきたいと考えています」

支えあう地域づくり　なないろの会

高齢者の健康と暮らしを支える地域の絆と仕組みをつくるため、地域での生活支援拠点づくりを支援することを目的に活動するグループ。主な活動内容は、①「つどいの場にじ」（通所型サービスB）における日中の居場所づくり（交流会、体操、会食、趣味活動など）、②有償ボランティア「ほっと　しらたか」（生活支援、移動支援、見守りなど）、③子ども食堂など。「つどいの場にじ」の利用日は毎週火・金曜日（祝日は休み）の午前10～12時（食事会がある日は14時まで）。利用料金は200円～。「ほっと　しらたか」は会員制で、年会費は1,000円。利用日時は月～金曜日（祝日は休み）の9～16時。利用料金は1時間700円（交通費として1回250円が加算）で、翌月に現金でまとめて支払い。活動者には700円のうち事務費100円を除いた600円と交通費全額を渡している。

●連絡先／〒992-0771　山形県西置賜郡白鷹町大字鮎貝3235
つどいの場にじ　TEL 080-1815-3289

看取り・終末期を考える

裏を見せ、表を見せて…

旅人かへらず 旅に病んで夢は枯野をかけ廻る 現代に通じる芭蕉の辞世

尾﨑　雄

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

松尾芭蕉の享年は51。大阪で弟子たちに看取られた。これは臨終の3日前に詠んだ「病中句」である。俳句サイト『芭蕉会議』の記述を借りて野暮な解釈を加えてみよう。人生の終末をリアルに問う一句だ。「旅」、「病」、「夢」という万人とりわけ高齢者を惹きつけるキイワードをたたみかけ、「枯野」を渡る風の音がザワザワか、サラサラか、人によっては違うだろうが、「かけ廻る」と動画風に人生の終末を見せつける。

現代俳句は、戦後のいっとき仏文学者、桑原武夫が火を放った「第二芸術」論争を経て、いまや隆盛を極めている。江戸期から明治、大正、昭和、平成を経て令和にいたった俳句は英語圏や漢語圏にも広がるグローバルアートになった。かつての高度経済成長が今の高齢者らに生き甲斐を楽しむゆとりをもたらした。同好の士と競いあう句会や適度な運動を伴う吟行は老後の健康づくりにもってこい。ひとりでいくつもの結社に参加している者やたまにしか作らない初心者も勘定に入れれば俳句人口１０００万とも言われる。俳句は季節の移ろいを自分事として、その人なりの小宇宙を与えてくれる暮しの文学に生まれ変わったからだろう。

冒頭の病中句には諸説ある。『芭蕉会

おざき　たけし
老・病・死を考える会世話人
1942年生まれ。元日本経済新聞編集委員。認定ＮＰＯ法人コミュニティケアリンク東京副理事長・日本死の臨床研究会会員・さわやか福祉財団評議員ほか

議』によると、明治・大正期は辞世句とされた。現代では病中句だとしても実質的な辞世句だとみなされている。ほかに、芭蕉は病中句をつくった翌日、旧句に手をいれた辞世句を残したという説もある。

清滝や波に散込青松葉　である。

弟子のひとり、路通の『芭蕉翁行状記』によると、芭蕉は毎日毎日の一句一句を辞世の気分で詠んでいたから、臨終に際して辞世句を残さなかった。高齢社会に生きる令和の芭蕉ファンも日々の発句を辞世として取り組んでいるのだろうか。

芭蕉の作品の過半数を「悪句駄句」と断じた明治の俳句イノベーター、正岡子規は36歳で夭逝した。辞世の句はよく知られている。

糸瓜咲いて痰のつまりし佛かな

緩和ケアもホスピスもなかった明治期に日夜、脊椎カリエスの激痛に苛まれる我が身の凄惨な姿をリアルかつユーモラスに詠じた。すさまじい気魄に満ちた「写生」の極致ではないか。

子規が否定したとはいえ芭蕉の死生観は現代人にピッタリ。「月日は百代（はくたい）の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして、旅を栖（すみか）とす……」という「おくのほそ道」の序文に魅かれて芭蕉の足跡をたどる俳句ファンは後を絶たない。

一つ家に遊女も寝たり萩と月

人生の現実を詩情に昇華するこの名句を自分なりに味わえる心境に辿り着いたのは昨年の秋。「おくのほそ道」を再読したときだった。病苦と闘った92歳の母親を看取り、その後、義父と義母の終末期ケアをする妻に寄り添って初めて芭蕉のいう「不易流行」の深意に触れたような気がする。変わらぬことも変わることも真実の一面なのだ、と。

さわやか豆知識

社会福祉法人
地域で期待される貢献

●公共性の高い民間法人

「社会福祉法人」という法人格の組織に接したことはありませんか？　社会福祉法人は、公益性、非営利性の高い事業を実施する民間の法人で、全国にある社会福祉法人の多くは福祉施設を経営しています。

戦前から、地域では、支援を必要とする高齢者や障がい者、子どものための事業を篤志家が私費や寄付で行っていました。戦後にできた社会福祉法によって、社会福祉法人制度が生まれ、行政の認可を得て、必要な社会福祉事業を行っています。社会の状況が大きく変わっていく中で、さまざまな社会生活上の困難や課題を抱える人々を支える重要な役割を持っており、各種補助金や税制上の優遇措置などを受けて幅広い活動を展開しています。

そうした中で、多様化複雑化する社会のニーズに将来に向けてしっかりと対応していくために、組織や事業のあり方が改めて問われることになり、社会福祉法人制度の改革が２０１６年に行われました。役員構成を含めた経営ガバナンスの強化や、事業の透明性確保などと併せて、〝地域における公益的な取り組み〟を実施する責務が設けられました。

●地域貢献への期待

地域では、どの世代、どの立場の人にも何かしらの課題がありますので、社会福祉法人がその資産やノウハウを生かして地域のために実践できることはたくさんあります。近年は地域貢献の形として、社会福祉法人のデイサービスが利用者送迎のない時間帯に地域住民の買い物支援や移動支援に送迎車両やドライバーを提供する、また、特別養護老人ホームの地域交流スペースを、地域の皆さんの多世代の居場所として提供するといった事例も増えてきました。地域のＮＰＯと積極的に連携しながら、さまざまな貢献的取り組みが広がりつつあります。また、現在、複数の社会福祉法人等が連携して役割を発揮するための「社会福祉連携推進法人」（仮称）の創設が議論されています。地域共生社会の実現、災害対応、福祉人材育成の連携などが想定されています。

ビジネスではない、公益的視点から地域貢献ができる社会福祉法人。生活支援コーディネーターや協議体と連携するように、地域の社会福祉法人も巻き込みながら、最後まで安心して暮らせるまちをみんなでつくりましょう！

新しい
ふれあい社会づくりに
向けて

ふれあい　いきがい　助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。
特に現在は、全国自治体が新地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりを強力に支援しています。
どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **新地域支援事業・助け合いの地域づくり**
  北から南から　各地の動き
- **その他の財団の活動　など**
  ご支援ありがとうございます。
  さわやかパートナー（賛助会員）・
  ご寄付者の皆様のご紹介

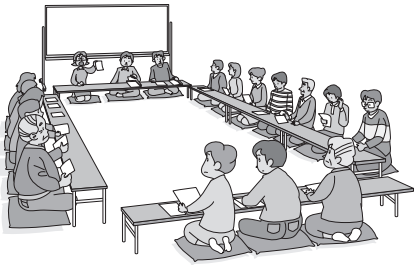
さわやか活動日記（抄）

北から南から

新地域支援事業・各地の動き

（2019年12月1日～31日）

●全国各地で、推進の支援をしています
●活動の一部を紹介しています



住民に参加を呼び掛ける
（住民対象のフォーラム、勉強会等）

大館市（秋田県）

4日／大館市で「第39回大館市社会福祉大会」が開催され、雪の中、市民や関係者ら約150名が参加した。社会福祉に貢献してきた個人、団体の表彰を行う式典の後、当財団が「支え合いで人生を豊かに」と題した講演を行った。また、生活支援コーディネーターや福原淳嗣市長が参加して、20年後の大館市を描いた寸劇「未来からの手紙」を披露。人口は半分ほどになっても、居場所や有償ボランティアによる助け合いが自然に行われ、子どもから高齢者までみんながつながり楽しく生活している姿を見て、参加者も支え合い・助け合いの大切さについて理解を深めたようだった。（鶴山）

羽後町（秋田県）

22日／秋田県県南の豪雪地帯でもある羽後町にて市民フォーラムが開催され、多くの市民が参加した。当財団の堀田力会長が「〝あなたが主役〟『助け合いの地域づくり』」として基調講演を行った。パネルディスカッションでは除雪を地域で担う共助組織や常設型サロンの取り組みに加え、山形県のさわやかインストラクター加藤由紀子氏が有償ボランティアの仕組みを紹介。堀田会長の進行で、第1層生活支援コーディネーターの小林諭史氏と同町の活動をどう広げていくか議論した。「助け合い見える化チャート」では、安藤豊町長にも登壇していただき、羽後町の助け合いの状況と必要性、参加について会場に呼び掛けた。有償ボランティアが地域に「ある」がゼロだったのに対して「ほしい」が9割と、必要性を会場全体で共有した。このフォーラムのアンケート記名者などを対象に、1月からは第2層協議体づくりと助け合いづくりを目的とした勉強会を開催していく。（鶴山）

敦賀市（福井県）

1日／敦賀市で、住民勉強会実施のきっかけとするための市民フォーラムが開催され、約50名の市民らが参加した。行政による現状と取り組みについての説明に続き、当財団から助け合いの意義と効果について講演した。その後、「助け合い体験ゲーム」と目指す地域像についてのミニワークを実施。同市では今後、第2層協議体編成に向けて、各圏域で住民勉強会を実施していく予定。（髙橋）

生活支援コーディネーター・協議体と連携

尾花沢市（山形県）

25日／尾花沢市で、住民、行政、社会福祉協議会、地域包括支援センターを対象に、生活支援体制整備事業と助け合いを共通理解するための勉強会が開催され、当財団とさわやかインストラクター加藤氏が協力。市の担当課長あいさつ、行政説明に続き、当財団が事業の意義等を伝えるとともに、アイスブレークで「助け合い体験ゲーム」をしながら各地の事例で助け合いの効果や必要性を説明し、体制をつくりながら助け合いの地域づくりをみんなで進めていきましょう、と呼び掛けた。その後の質疑応答でも参加者の反応は良く、アンケートにおいても住民の前向きな様子がわかった。今後は、アンケートに記名した20名ほどの住民を実行委員会として、3月末の市民フォーラムに向けて活動を進めていく。（鶴山）

かすみがうら市（茨城県）

3日／かすみがうら市では、大づかみ勉強会から発足した第2層協議体が活動を続けている。今回はこの構成員が集まり、当財団も協力。地域情報の共有とともに地域の協力者で見守りが始まった様子など、各圏域の活動状況を共有した。（長瀬）

川島町（埼玉県）

11日／川島町の第1層協議体が開催され、当財団もオブザーバーとして参加した。同協議体では、住民主体の生活支援・介護予防に資する活動を集めた資源マップの作成に1年間取り組んできた。今回は、作成した立場から「集いの場を通じてつながり、助け合う関係をつくっていこう」というメッセージをマップの冒頭に入れることなどを決めた。年度内完成を目指し、ケアマネジャーや必要としている人に配布していく。（岡野）

板橋区（東京都）

4日／板橋区で第2層協議体の連絡会が開催され、当財団がアドバイス協力した。この企画は協議体の円滑な運営に有効だが、大都市部では圏域数が多くなるため工夫も求められる。板橋区では、これまでのように全圏域を一括して行うのではなく、今回は全18の圏域を4ブロックに分けて実施。全圏域の情報は得られないが、事業としてある程度の経験と実績があれば、より具体的な活動状況を把握できる点で有効な方法である。（長瀬）

多治見市（岐阜県）

23日／岐阜県が実施する生活支援体制整備事業推進に向けたアドバイザー派遣として、関係者向け勉強会に制度説明と全国事例等の情報提供で当財団が協力した。（長瀬）

新潟市（新潟県）

19日／新潟市の戦略会議が「実家の茶の間・紫竹」で行われ、当財団もメンバーとして参加。来年度に向けて、モデルハウスの位置付けについて議論したほか、介護保険の次期改正も踏まえて、政令市としてどのような戦略で進めていくか、また、3月開催予定の市民フォーラムについても話し合った。（鶴山）

周南市（山口県）

7日／第2層圏域での取り組みを市民に紹介する「共に支え合うまちづくり活動発表会」が周南市学び交流プラザで開催された。居場所や有償ボランティア、第2層協議体の取組報告に加え、周南市立周陽中学校1年生の磯本千夏さんから健康福祉に関する作文・最優秀作品「私が考える『みんなで取り組む福祉のまちづくり』」が発表され、会場内での共感が広がっていた。

市では、この発表会も一つの契機としながら、市社協と連携して住民主体の活動拡大に取り組んでいく予定。（高橋）

宿毛市（高知県）

24日／宿毛市では、大づかみ勉強会で発足した協議体が活動を継続している。今回は、関係者として部や課を越えて庁内全体を対象にした勉強会が企画され、当財団は情報提供で協力した。自治体全体の取り組みとして進められている。（長瀬）

協議体編成のための研修会・勉強会等に協力

加須市（埼玉県）

10日／加須市北川辺地区で、11月の地域フォーラムに続き、第2層協議体を設置するための大づかみ勉強会が行われ、住民41名が参加した。当財団からの講義、「助け合い体験ゲーム」に続き、助け合いの大切さについて理解を深め、目指す地域像について話し合うグループワークを実施。住民フォーラムからの参加者も多く、「自分たちでできることは何とかしていきたい」という力強い発表が聞かれた。大づかみ勉強会はあと2回行う予定で、財団も引き続き協力する。（岡野）

佐久穂町（長野県）

10日／佐久穂町では、2019年8月に開催した住民フォーラムをきっかけに、関心を示した住民を中心とした勉強会（協議体準備会）を行ってきた。途中、台風による開催延期もあったが、9月から継続して開催してきた。今回は最終回となる3回目で、約50名が参加した。今後は、アンケートで協議体参加に手を挙げた人を中心に第2層協議体を編成、各地のニーズ把握に取り組んでいく予定。（高橋）

各務原市（岐阜県）

11日／各務原市の第1層協議体発足に向けた意見交換会が開催され、既存の第2層協議体の構成員などを中心に約30名が参加した。当財団は岐阜県のアドバイザー派遣事業として協力し、制度の振り返りや意見交換で情報提供等を行った。（長瀬）

瑞浪市（岐阜県）

16日／岐阜県が実施する生活支援体制整備事業推進に向けたアドバイザー派遣として、関係者向け勉強会に制度説明と全国事例等の情報提供で当財団が協力。参加した行政、包括、社協などの関係者とともに、具体的な取り組みに向けて意見交換を行った。（長瀬）

美濃加茂市（岐阜県）

5日／岐阜県が実施する生活支援体制整備事業推進に向けたアドバイザー派遣として、住民向け勉強会に制度説明で当財団が協力した。（長瀬）

垂井町（岐阜県）

15日／岐阜県が実施する生活支援体制整備事業推進に向けたアドバイザー派遣として、住民向け勉強会での制度説明で当財団が協力。参加者にアンケートを実施して協議体への参画について希望を確認し、今後実践に向けた計画を進める予定。（長瀬）

羽咋市（石川県）

3～4日／羽咋市では第2層協議体を公民館圏域で編成していきたい考えで、圏域ごとに住民勉強会（協議体準備会）を開催してきており、当財団も協力している。今回は、神子原地区（3日）と鹿島路地区（4日）の住民勉強会でそれぞれ最終回にあたる。講話や他市事例、グループワークで協議体の役割を共有し、アンケートで協議体への参加意向を確認した。2地区とも今年度内の協議体発足を予定している。（高橋）

鳥取市（鳥取県）

12日／鳥取市湖南地区での住民勉強会に当財団が協力。第2層協議体を編成する目的の継続勉強会で、今回は最終回の3回目。グループワークでは協議体の活動と構成員を協議、アンケートでは協議体への参加意向を確認した。今後は、協議体参加に手を挙げた住民を中心に、第2層協議体を発足させる予定。（高橋）

東彼杵町（長崎県）

21日／東彼杵町の第1層協議体選出について意見を出し合う勉強会の3回目が実施された。第1層生活支援コーディネーターの池田栄美子氏がこれまで2回の勉強会の振り返りを行い、当財団が基調講演の講師とグループワークで協力。講演では、生活支援コーディネーターと協議体の役割を確認し、事例紹介をしながら住民の声が大事であること、住民に働き掛けることで必要性を実感しながら、次に何をすればよいかが見えてくることを伝えた。グループワークでは、協議体に参加してほしい人の名前が多く出て、アンケートの協議体への参加意思表示にも15名ほどが記名した。1月末に協議体発足式

を開催し、そのメンバーで3月開催予定の住民フォーラムの準備を進める。（鶴山）

生活支援コーディネーター養成研修等に協力

福島県

4日／福島県主催の「令和元年度生活支援コーディネーター養成研修」の第2回が開催され56名が参加、当財団が講師として協力した。午前は、住民主体の協議体運営に関する財団からの情報提供の後、同県桑折町と鮫川村から協議体活動の実践報告が行われた。午後はグループワークで、協議体の進め方について良い点と課題を共有。それを基に、効果的な協議体の運営方法をグループごとに協議し、最後に全体で共有した。（岡野）

福井県

2日／福井県主催の「令和元年度生活支援コーディネーター養成情報交換会」が開催された。生活支援コーディネーター同士のネットワーク構築も目的の一つで、県内を2圏域に分けて実施している。今回は嶺南地区での開催（嶺北圏域は11月26日に開催済み）で、事前に提出してもらった「直面している課題」についてグループワークを行い、意見交換した。今年度は、2月に県全体の生活支援コーディネーターフォローアップ研修を開催する予定。（髙橋）

助け合いの地域づくりのために協力

春日井市（愛知県）

12日／春日井市の介護保険居宅・施設事業者連絡会ケアマネジャースキルアップ研修に、当財団が講師として協力。生活支援体制整備事業と総合事業について全国事例など情報提供を行った。地域の助け合いについて「助け合い体験ゲーム」で考え方を共有し、インフォーマルサービスの可能性についても意見交換した。（長瀬）

京都府

7日／今年で8回目を迎えた京都府社協連合会主催の府内市町村社協実践交流会が開催され、約700名が参加。当財団の堀田会長が「昭和、平成、令和の助け合いの変遷」をテーマに講演を行った。ほかに、丹後ブロック4市町の生活支援コーディネーターによる寸劇、見守りなどの実践報告、ポスター展も行われ、各ポスターでの課題に対し、堀田会長がコメントした。（編集部）

大垣市（岐阜県）

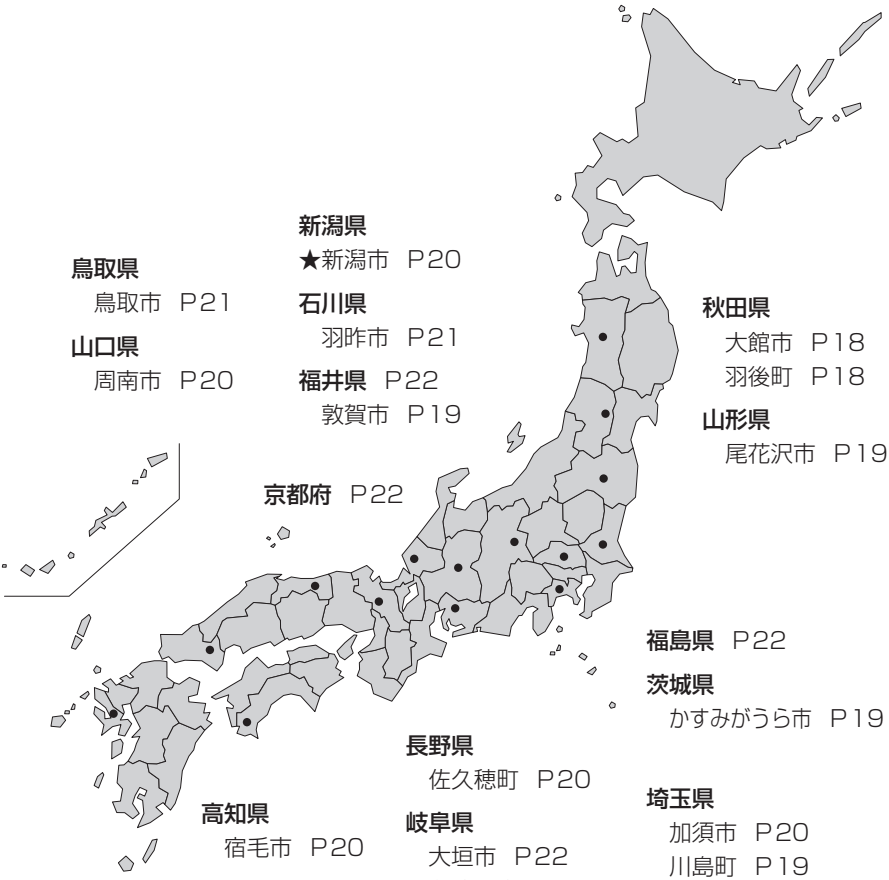
15日／令和元年度大垣市男女共同参画フォーラムが「高齢社会をよくする女性の会　岐阜・大垣支部」の企画として開催され、当財団が講師として協力。情報提供とともに「助け合い体験ゲーム」も行い、地域の助け合いの重要性と住民の意識などについて、参加者と意見交換した。（長瀬）

（本稿は、岡野貴代、髙橋望、鶴山芳子、長瀬純治）

助け合いの地域づくり

新地域支援事業関係で今月号に掲載した地域を紹介します

「●」は今月号に掲載している地域、地域名の後のページ数は掲載ページです。
最初に★が付いている地域は、当財団と包括連携協定を締結。



秋田県
大館市　P18
羽後町　P18

山形県
尾花沢市　P19

福島県　P22

茨城県
かすみがうら市　P19

埼玉県
加須市　P20
川島町　P19

東京都
板橋区　P19

新潟県
★新潟市　P20

石川県
羽咋市　P21

福井県　P22
敦賀市　P19

京都府　P22

鳥取県
鳥取市　P21

山口県
周南市　P20

長野県
佐久穂町　P20

岐阜県
大垣市　P22
各務原市　P21
多治見市　P20
瑞浪市　P21
美濃加茂市　P21
垂井町　P21

愛知県
春日井市　P22

高知県
宿毛市　P20

長崎県
東彼杵町　P21

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。
会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。
新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。
また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

（敬称略）（2019年11月23日～12月31日財団受付分）※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますことをご了承ください。

さわやかパートナー個人（78件）

北海道
加藤　孟
金澤　勉

岩手県
大久保　孝信
大和田　剛史
戸田　公明

宮城県
秋山　喜弘
小野寺　憲一

福島県
ツノダ　ユミコ
矢吹　道徳

茨城県
佐川　暁子
佐藤　芳夫
野崎　照子

栃木県
佐々木　治子

群馬県
市村　雅昭
高橋　恵理
林　純子

埼玉県
大藤　玲子
菅野　善男
佐藤　幸策
菅谷　雄一
田中　茂利
西野　優子
平居　和佐子
前田　恭平

千葉県
石井　榮一
伊藤　壽弘
菊地　多鶴恵
北田　仁則
佐野　敏子
清水　勇男
丹澤　明子
丹澤　泰夫
西原　清隆
星野　文子
堀井　豊
本名　幸作
山田　真幸

東京都
姉崎　猛
大石　芳野
久保　裕
酒井　郁子
島崎　節子
鈴木　裕子
竹内　弘
田所　裕二
谷本　憲一
辻村　哲夫
森　恒俊
山崎　威司
吉原　初江
匿名希望

神奈川県
岩瀬　正直
太田　昭
古賀　啓子
妹尾　信二
高橋　秀和
福江　孝夫
箕輪　久美子
茂木　克美

新潟県
須田　貴子

山梨県
石田　義愛

長野県
古川　静男

静岡県
伊藤　操代
花園　玄

愛知県
笠原　盛泰
堤　孝雄

三重県
藤田　清正

大阪府
貝　哲正
二井矢　道生
西井　久
前田　正道
前東　ふみ子

兵庫県
小川　忠志

奈良県
橋本　昌子
湯川　基子

島根県
三宅　幸恵

広島県
植木　茂

福岡県
柳　誠

さわやかパートナー法人（21件）

株式会社エーシーエ設計
大阪西運送株式会社
岡田運輸株式会社
沖電気工業株式会社ＯＫＩ愛の募金事務局
医療法人ケイセイ会パークサイドクリニック
埼玉相互住宅株式会社
ＮＰＯ法人
さわやか徳島〝幸せの家ありがとう〟
ＮＰＯ法人
さわやかファミリーサポートセンター
サントリービバレッジソリューション株式会社
シスメックス株式会社

シャネル株式会社
医療法人勝久会
新宿グリーンビル管理株式会社
株式会社
スミセイ・サポート&コンサルティング
関彰商事株式会社
株式会社セラピスト
全国労働者共済生活協同組合連合会
長野県生活協同組合連合会
日本フレーバー工業株式会社
パラマウントベッドホールディングス株式会社
株式会社堀場製作所

一般ご寄付（14件）

いそごまごころの会（故白石　孝徳）（10万円）
岡村　紀男（5千円）
加藤　孟（1万円）
川淵　三郎（30万円）
髙橋　愛子（2万円）
堤　孝雄（4万円）
トラベル・スタンダード・ジャパン株式会社（2件・10万円）
ほっこり倶楽部（3万8800円）
ボランティア・ベンダー協会（46万6422円）
宮中37会（2万1千円）
米田　俊子（1万円）
和田　和子（5万円）
匿名希望（10万円）

『さぁ、言おう』バックナンバー
主な特集記事のご紹介

2020年1月号

●**巻頭言**
「助け合いのこれから」清水肇子
●**寄付・遺贈のこころ**
故 大友恭子さん
故 平栗稔さん
故 須永道子さん
●**活動の現場から**
おおいし絆クラブ（福岡県）
●**看取り・終末期を考える**
「『人生会議』は老いも若きも」
尾﨑 雄

2019年12月号

●**巻頭言**
「どんな住まいと住まい方を望みますか？」清水肇子
●**寄付・遺贈のこころ**
故 遠藤利枝さん
●**活動の現場から**
せいかつ応援倶楽部（静岡県）
●**看取り・終末期を考える**
「1000の希望を天高く いま期待されるボランティア」
尾﨑 雄

2019年11月号

●**巻頭言**
「災害と助け合い」清水肇子
●**寄付・遺贈のこころ**
故 近持弘子さん
●**いきがい・助け合いサミット in 大阪**
ＪＰ労組近畿地方本部のボランティアご支援
●**活動の現場から**
所沢ネオポリス買い物支援隊（埼玉県）
●**看取り・終末期を考える**
「読まれなかった幻の弔辞『さよなら』だけが人生だ」尾﨑 雄

その他の内容 新地域支援事業・各地の動き／さわやか豆知識／みんなの広場／新・ひとりごと　ほか

◆お問い合わせは広報まで
→ TEL（03）5470-7751

さわやか活動日記（抄）

〈2019年12月1日～12月31日〉

ふれあい推進事業

復興支援プロジェクト

「県外避難者支援」

ふくしま避難者交流会 開催

【12月21日】

「ふくしま避難者交流会」が東京・有楽町の東京国際フォーラムで開催された（主催・福島県、共催・さわやか福祉財団、東京都）。交流会は、東日本大震災により福島県から首都圏に避難されている方々を対象とし、交流の場や福島県の復興に向けた取り組みに関する情報の提供、住宅や教育等に関する個別相談を目的として毎年開催されているが、9回目となる今回は69名が参加した。

交流会では、福島県地域復興局・安齋浩記局長の開会あいさつに続き、復興支援課・三塚淳課長より復興に向けた福島県の取り組みについて説明があり、その後、MJCアンサンブル（南相馬ジュニアコーラス）による合唱演奏が披露された。演目の最後では「ふるさと」を参加者も一緒になって歌い、会場全体が一つになった。福島県の内堀雅雄知事も駆け付け、あいさつするとともに参加者の各テーブルを回り、避難者の皆さんから直接話を聞いた。

交流会後半は、参加された皆さんの交流の場と個別の相談会となり、避難元の市町村を同じくする参加者同士の熱心な情報交換や語り合いでにぎやかな交流会となった。また、個別相談では、福島県の担当職員や専門家による就学支援、住宅支援、放射線・除染や総合相談等8つのブースが設けられ、参加者の方々からの相談に応じた。

まもなく震災から9年となる。福島県からの現状報告によれば、2019年4月20日にはJヴィレッジが全面再開するなど復興や環境整備は着実に進んでいるが、避難者数は19年7月においても未だ4万3000人（内、県外避難者約3万2000人、震災発

生直後約16万5000人、内、県外避難者約6万2000人）であり、地元に戻りたいという強い意向を持たれている方も多い一方、地域によっては戻らないという意向の避難者の方もいるという。交流会開催に向けて昨春から福島県、東京都とともに準備を進めてきたが、引き続き避難者の皆さんに対していろいろな形での支援を継続していきたい。

（内田）

その他

【12月13日】

東京都東村山市の老人クラブ連合会主催「友愛実践活動事例講習会」で講師を務めた。これは、2018年から東京都老人クラブ連合会の支援・助成により都内54自治体の老人クラブで順次行われている講習会の一環である。会場は東村山市民センター会議室で、参加者は約100人。当市や東京都の老人クラブ連合会の役員のほか、市の健康福祉部、都の保健福祉局など行政からの参加もあり、テーマである「支え合いの仕組みづくり」の今後の広がりが期待される。

（丹）

事務所だより

●ある日、スタッフのSさん（男性）が綺麗な黄色の上着を着てきた。冬になるとけっこう早く暗くなるし、高齢者の人はなるべく明るい色の洋服を着ると目立って、周りの人が気にしてくれて、事故防止にもなるね…と女性スタッフからは注目の的。本人は黄色が苦手（?）らしいが、とってもステキですよ！ 皆さんも明るい色を着て、寒さを吹き飛ばしましょう。

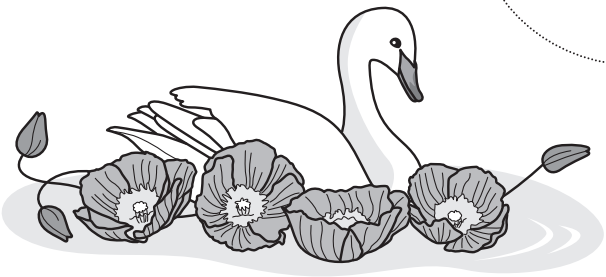
浦戸桂島復興連絡協議会に活動支援金を贈呈

昨年11月26日、さわやか福祉財団は、浦戸桂島復興連絡協議会と合意書を締結し、活動支援金280万円を贈呈した。活動支援金は、全国から頂戴した義援金を原資とするもので、浦戸桂島復興連絡協議会が行う宮城県塩竈市浦戸諸島の復興・まちづくりの活動に充てられる。当財団は、東日本大震災直後から重点支援地域の一つとして支援しており、2014年には、「ＳＡＷＡＹＡＫＡ丸」を寄贈したが、現在も一般社団法人浦戸自主航路運営協議会により運航され、塩竈港と浦戸諸島を結ぶ島民の貴重な足となっている。

浦戸桂島復興連絡協議会では、このＳＡＷＡＹＡＫＡ丸の運航支援をはじめ離島地域活性化のための事例視察、住民参加のワークショップの開催、島民が日常的に語らう場の設計・運営、餅つき大会などの島民が集うイベントの開催を計画している。浦戸桂島復興連絡協議会の活動により、住民主体の復興まちづくりがさらに進むことを応援したい。

（内田）

みんなの広場



社会福祉の進歩に感服

三村　靖恵さん　80歳　兵庫県

先日、堀田力先生のご講演に接しました。数十年余り前に姫路市において先生のお話を拝聴したときはナルクの会員でしたが、先生のご尽力でずいぶん社会福祉関係が進歩してきたことにあらためて感服いたしました。齢80歳にして、現在は「老人いきいき絆クラブ」のお役を務めておりますので大いに勉強させていただきました。私自身のボランティアと痛感しております。

幸せになりたいと望むみんなの力だと実感しています

私の住まい、居場所に

山田　治男さん　94歳　千葉県

私は、自宅を40年前に新築しました。その際に自宅での葬儀を予定しておりましたので、1階の8畳間を客部屋に、隣接して6畳間を仏間として両部屋に縁側をつくりました。

現在では近所の方々の通いの場としてこの2間の14畳を開放しており、7年目になりました。毎週1日10～13時の間、カラオケや体操、軽食で楽しんでいますが、毎回10名以上の方が来訪し、楽しく元気に暮らしています。本年度からは市原市の補助金をいただき、ポイント制度の公認事業所となりました。

名古屋サミットでアピールする「新しい客間」の先行モデルですね

Tsutomu Hotta

『さぁ、言おう』投稿募集

あなたの意見を社会へ生かそう

『さぁ、言おう』は皆様の声を社会につなげる
問題提起型情報誌です。

ぜひ皆様の声をお寄せください

『さぁ、言おう』では、取り上げたテーマに対する読者の皆様からのご意見・ご感想、あるいは普段気になっているテーマに基づいた体験談や提言などを随時募集しています。

常設テーマ

- 地域の助け合い活動について
- 助け合いの地域づくりについて
- いきがい、社会参加について
- 居場所や地縁組織、ＮＰＯの活動について
- 新地域支援事業について
- 生き方について　など

投稿の方法

- 字数や回数制限はありません。ただし、掲載にあたっては誌面の都合上、編集要約する場合がありますのであらかじめご了承ください。
- 一般投稿は形式は問いません。本誌添付の投稿ハガキなどもご自由にご利用ください（ただし原稿はお返しできません）。
- 投稿は、事情が許す限り本名でお願いします。
  ただし掲載時には匿名、あるいはペンネームの使用も可能ですので、その旨お書き添えください。
- 投稿時には、お名前のほかに、ご住所、連絡先お電話番号をご記入ください（内容により質問させていただく場合があります）。性別、年齢もよろしければお書き添え下さい。大変参考になります。

送付先

〒105-0011　東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館７階　公益財団法人さわやか福祉財団
『さぁ、言おう』編集部宛
FAX（03）5470-7755
E-mail　pr@sawayakazaidan.or.jp

私たちはふれあいあふれた地域づくりを支援しています

さわやか福祉財団の活動をぜひご支援ください。

『さぁ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さぁ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。
さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人年会費	Aコース	10,000円
	Bコース	3,000円
法人年会費（1口）	Aコース	100,000円
	Bコース	20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の控除対象となります。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の控除対象となります（所得税の寄付控除額の上限は所得の40%－2000円）。

一般ご寄付をいただく場合のお振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団
郵便払込　００１２０-９-６６８８５６※
三菱ＵＦＪ銀行　浜松町支店　普通預金　口座番号３７３１７１４
りそな銀行　芝支店　普通預金　口座番号１１７４２９７

※手数料不要の専用用紙をご用意していますのでお申し出いただければご郵送します。

＊いずれもお問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。（mail@sawayakazaidan.or.jp）

表紙絵から　はり絵・池田げんえい

「虹と凍鶴」

編集後記●これからの地域助け合いには有償ボランティアが欠かせません。理事長が巻頭言で書いています（Ｐ２～）。●「寄付・遺贈のこころ」は、故小髙根美那子さんと故小島正治さん。社会福祉に関心を持ち、当財団に思いを託してくださいました（Ｐ４～）。●住民有志で始めた活動を包括や生活支援コーディネーターが支援し、仲間を増やし、居場所から有償ボランティアへと発展しています（「活動の現場から」Ｐ８～）。●「看取り・終末期を考える」、芭蕉の死生観、辞世句について語られています（P14～）。

助け合いを
広げよう！

新 ひとりごと

清水　肇子

教えられたこと、身に付けた知識を、
どう自分自身のものとして、まちとして表現できるか。
従い、学ぶ時代から、「動く」ことが一番に問われる時代になった。
体がたとえ動かなくとも、できる行動はさまざまある。
いくつになっても、誰もが自分の思いいっぱいに
人生のアクセルを踏める社会にしよう。
その幸せがわかるからこそ譲り合い、助け合うことが
自然にできる社会を目指そう。
古いルールブックは自由にいつでも書き換えられるのだから。

●公益財団法人さわやか福祉財団理事長
東京の地下鉄は知らない人には迷路状態、
掲示板を見上げて困っていそうなときは、
声かけお節介をしています。

さわやかおう 2月号

通巻318号　2020年2月10日発行
（毎月1回10日発行）
表紙絵　池田げんえい
イラスト　すずきひさこ
細馬一紀
福島康子
レイアウト　菊池ゆかり
印刷所　日本印刷株式会社
編集担当　塩瀬潔泉

発行人　清水肇子
発行元　公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751　Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
https://www.sawayakazaidan.or.jp
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

さわやかおーつ 2月号
令和2年2月10日発行
（毎月1回10日発行）
通巻318号
発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011 東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階

お住まいの地域づくりフォーラムに ぜひ皆さんも参加しませんか？

地域づくりフォーラム 主な開催日・場所

3月7日（土） 東彼杵町（長崎県） **3月28日（土）** 尾花沢市（山形県）
3月16日（月） 新潟市（新潟県）

※月日・場所・内容等が変更になる場合があります。
※当財団が協力しているフォーラムも紹介しています。

具体的お問い合わせは当財団までお願いします。→TEL（03）5470-7751

当財団ホームページでも詳細をご紹介しています。
→https://www.sawayakazaidan.or.jp

さわやか福祉財団 全国交流フォーラム

まもなく開催！

2月25日（火）に **2019年度さわやか福祉財団全国交流フォーラム** を開催します。

全国の皆様が一堂に会して、広く情報交換、交流する場となっております。

お申し込みいただきました方へは、順次参加証をお送りしていますので、当日ご持参ください。ご来会を、一同お待ちしております！

お申し込みは、定員になり次第締め切りとさせていただきますので、あしからずご了承ください。